

平成18年度 第1回高知県人権教育推進協議会まとめ

日 時 平成18年7月11日(火)13:30～16:30
場 所 高知共済会館 3階 金鶏の間

1 開 会

(1) あいさつ

(2) 日程確認

2 報告及び協議

(1) 報告事項

前回協議のまとめ

平成18年度人権教育施策について

(2) 「HIV感染者等の人権」にかかわる課題と教育の取組

【テーマ：HIV感染者等にかかわる人権課題を解決するための教育をどのように進めるか】

取組の現状と課題について

質疑応答

協議

全国的なニュースになった頃に比べて啓発も進んでいる。やはり正しい情報を個人の人権を侵害しない範囲で提供することが大事。ただ、学校ではHIV感染者の人権については学習機会が少なく、手法もペーパー学習が主流で、身近な問題にまだなっていない。

ハンセン病元患者と交流している方に話を聞いた。元患者もその家族も差別や偏見に苦しみ、立場を語れずに今日まで来た人々も少なくない。里帰り事業で、ある元患者が故郷へ帰ることができた。それを受け入れた家族が「家の中から変わらないと社会は変わらない」と。私たちも含め、一人ひとりが自分の身の回りから変えていかない限り変わっていかないことを実践されている方の話を聞き、ものすごく感動した。

また、大島青松園のドクターの言葉で忘れられないのが、「人にうつらないから、その回復者のことを認めるといのはおかしいのでは」と言われた。「うつらないから、差別しない」ではなく、一人ひとりを認め、大事にすることが大前提だということも勉強させてもらった。

学校の関心もまだまだ薄い。HIVに関して言えば、感染経路も明らかになっているし、HIV感染者とそうでない方が結婚されている状況ある。HIV感染者等の人権に関して、正しい知識をきちんと獲得するなど、学校教育の現場でも早い時期から取りあげて学習していただきたい。

学校における性教育の中でエイズについて知識としてきちんと手渡していかなければいけない。そのあたりの認識を学校現場でももっていただきたい。

世界で最もエイズ遺児が多いウガンダに、「同じ遺児の悲しみには国境がない」ということで、病死、交通事故死、自死の親を持つ学生が3年前に「あしながウガンダ」という事務局をつくり、エイズ遺児が心のケアをするために集うスペースを構えている。その遺児の一人の女性が、4月に早稲田大学国際教養学部合格し、学生寮であしなが育英会の学生たちと共同生活をしている。そこでは全く偏見がない。彼女は、日本とウガンダの架け橋になりたいと日本語を勉強している。もし日本で、親がエイズだという子どもが自分の希望を持って

進路を開くとき、どこまで周囲が応援し、受け入れてくれるだろうか。そこで共同生活を
する仲間がどれくらいいるだろうかと考えさせられた。

かつて、大阪の街で同僚と二人でいるとき、偶然、エイズを発症していた高校生にあった。
彼は、「家の中にも入らせてもらえない。僕の行くところはない」と。同僚はすぐ府立病院へ
連絡を取り、その後、彼が亡くなるまで支え続けた。当時の私の行動を今思うとき、知識不
足とともに、人の思いに立ち切ることができなかつたのではと反省する。また、昔、となり
の地域のハンセン病にかかった娘さんが、私たちの地域に入ってくる橋のたもとに小屋を建
てて暮らしていた。食事を持っていったのは被差別地域の人たちだった。私の父、叔父叔母
なども学校へ行きながらその人に声を掛けていったという。被差別の立場に立ち切るとはど
ういうことなのか、現在も学ばせてもらっている。

やはり人権を学ぶうえで一番大切なことは、被差別の立場の人との交流。そういうなかか
ら感性で学びとっていくことが基本。H I V感染者、ハンセン病元患者が自分のことを堂々
と主張していける社会状況ではまだない。

学校でも、例えば性教育などを通して正しい知識を学ぶとともに、当事者や具体的な事例
から学ぶということも話を聞いていて大切だと思った。一方で、偏見や差別を生まないとい
う意味で、正しい情報公開の必要性を感じた。

以上、事務局のほうで教育の参考に考えていただきたい。

(3) 「命の大切さの実感」にかかわる課題と教育の取組

【テーマ：命の大切さを実感させるための教育をどのように進めるか】

課題提起（委員）

21世紀のキーワードは「人権・平和・環境」。根幹には人間の命の大切さがある。しかし、
現状では差別、虐待、テロ、環境破壊など、非常に人命軽視の風潮が強い。教育だけでなく、
政治・経済などさまざまな問題はあがるが、こうした状況のなかで人命を大切に
する教育をどうするかを学校や家庭、地域社会で私たちが考えることが必要。子ども
たちに命の大切さを伝え切れていないとすれば、原因は何か。

日常生活の中で人を大切にすること、相手の痛みを想像することなどを家庭や地域のなか
でおとながしっかりと教えることができているか。

自然に学びながら、命の素晴らしさに対する感動、感性の豊かさなどを子どもたちに育ん
でいるか。

犯罪加害者に多く見られるように、幼少時において虐待などにより、愛情を受けて育つて
なく、人格形成に影響が出ているような状況があるのではないか。

劇画・漫画、映像メディア、最近ではインターネットの弊害。

途中で自分でブレーキを利かせるような一つの習慣が身に付いていないのではないか。

人権教育と同じで、命を大切にするという心情や態度を、学校と地域・家庭の中で子ども
たちにどう育てていくかということが大きな課題であり、私たちに突き付けられている。学
校、家庭、地域の役割があると思うが、子どもの通学の安全の問題も含めて、多くのおとな
の力を、もっと教育の中へ取り入れて、命の大切さを伝えていかななくてはいけない。

土佐の教育改革の中では、豊かな人間性、あるいは地域・家庭・社会の連携というものも

大きくうたわれているが、学力の向上はもちろんだが、あわせて、命を大切にすることを育てていく必要がある。

協議

子どもたちは教室で飼っている本当に小さな命の誕生にも感動する。そんな時間を今の限られた時間の中の学習でも豊かに与えてあげたい。

人を大切にすることにかかわる感性や感動などを、日々、こだわりながら保育・教育することで、それが子どもに返っていく。最近の保育現場での出来事を通して、改めてそのことを感じている。

子どもたちに相手の立場に立てなどと言う前に、その子どもたちがどれほど自分が満たされているのかを思う。自分でいっばいで、相手のことなど考えられない子どもが結構多いのでは。おとなでもそう。いわゆる自尊心感情というものをお互いがどこかで意識しながら認め合ったり、励まし合ったりするなかで自信がついた子どもが、相手の良さも見出していこう、相手のことも考えようとなるのではないか。そういう視点で子どもの生活を見て、子どもの心に届くような言葉を掛け合うようなおとなでありたい。

一人ひとり、その子が理解されにくい時代。軽度発達障害、不登校、非行の子どもたちをはじめ、子どもたちの言動の表面的なところだけを見て、その根っこにあるものに気がつきにくい面があるのではないか。一人ひとりの子どもの思いをおとなが大切にすくいあげていくことが、命の大切さを感じることにつながるのでは。自分の命や生き方を大切にされたという実感があって初めて、人の気持や命を大事にするのでは。一人ひとりの違いを大事にすることが、命を大事にすることにつながると思う。

まず、親や先生、そして友だちそれぞれが「あんたのことが大切なんよ」ってどれだけ言えるような関係性がつくれているかっていうことが大事。「失敗OK、間違ってもOK、そこから何かを見つけていく」というような、そういう子どもの権利をきちんと家庭や学校でも認めていくことをしていけば、随分違ってくるのではないか。

自分の子育てを考えた場合、もう少し子どもに共感できる時間があれば、感情の豊かさをもっと伸ばせるのではないか。逆に、自分がかかわれていない部分を、子どもに責任を転嫁しているところはないだろうか。教育だけにこの問題の責任を転嫁するのではなく、私たちおとなが一人の人間として、本当にこの問題を考えていかないといけないと痛感している。子どもは身近なおとなに一番影響を受ける。子どもに教えるという前に、おとながどう思っているかを考え直すことも必要では。

命の大切さを実感するということが大切。食育は、自然や生産者への感謝の心情を育てることにつながる。また、食を通して、親子や祖父母と孫も対話できる。そういうことを日常化していけば、まさに命を実感する子どもたちが育ってくるのでは。

動植物を育てている教室があるが、教師の意識によって大事にされ方が全く違う。命の大切さを教師がどこまでこだわって実現できているかが問われてくるのではないか。一方で、心の原点は、先祖に対する気持ちなど、自分の命の原点をどう敬っていくかというところにある。そのあたりが今、日本に失われてきているのではないか。

命を大切にすることを教育について、文部科学省の「人権教育の指導方法等のあり方について」から押し進めていくべきではないか。そこでは、自分を大切とするとともに、他の人の大切

さを認めることができ、具体的な行動や態度で表していくことが人権教育の目的だと明確に位置づけている。学校教育活動全体を通じ、家庭・地域、就学前や小・中・高の連携のもとに徹底して進めていくことが、命の大切さにかかわる課題を解決していくポイントではないか。「とりまとめ」を柱にぜひ一緒に取り組んでいきたい。

映像メディアの弊害・暴走が大きく影響している。それを改善する必要がある。感性に訴えるために、おとなが、命を失う悲しみについて子どもたちに生の声を伝えるという方法をもっととっていいのではないか。一方で、子どもが周りからしてもらったことに対して、「　　してくれてありがとう」というように毎日振り返り、書き留めていくという方法もいいのでは。繰り返すことで、感謝の気持ちに気づくことにもつながる。

やはり想像力の欠如ではないか。自分のこととしてとらえることができるかどうか。自分のことと感じられたときに人は動ける。家庭や学校でできることは体験ではないか。子どもと時間を過ごし、ともに体験し、感動を伝えていく。しかし、残念ながらおとなの側に余裕がないとなかなかできない。犯罪に走った子どもたちの生育歴をみると、小さい頃からいじめられていたり、親から愛されずに育った経験が多いという。愛される、肯定されることを感じることで、自尊感情や他者への感謝も生まれてくる。そのとき、他の人にもこの喜びをこう伝えようという行動になってくるのではないか。

命を大切にするということは、いろいろな角度から考える必要がある。まずは、想像力の問題。イメージとイメージを結ぶ力が弱くなっているのを感じる。それは、本を読まないことに起因しているのではないか。次に、自分の気持ちや考えていることを相手に伝えることがうまくできなくなっている。これまで教育中で、コミュニケーション能力の育成をあまりしてこなかったのではないかと。それから、自立心。今の社会はあまり希望がもてない社会。だからこそ、困難なときに立ちあがれる力をつけてあげる必要がある。そのためには、体験や経験、悩ませることが大事。そういうことを学校としてどう仕掛けをしていくのが課題とも言える。

家庭だけでは子どもは育たない。やはり学校・家庭・地域で育てることを考える必要がある。最近、PTAへの参加率も悪く、自分の子だけ見ている親が多くなったように思う。親同士が顔を見れないということは、そこにはもう地域性がないことになる。

地域の高齢者とふれあう学習があった。高齢者に昔遊びを学んだり楽しんだり。高齢者もイキイキしていた。そのなかで、命というものの年齢を超えた何か感じるところが場面場面であった。それぞれの地域のなかで、キャリアを多く積んでいる方たちとの触れ合いをとおして、命の大切さについて考えることができるのではないか。

小・中・高校の子どもたちは、命の大切さは漠然とかもしれないが知っている。でもそれがどう大切なのかがなかなか感じ取れていないのでは。命のある自分という存在にどんな意味があるのかなど、そういうところで日々もがいているのではないか。しかし、それを感じ取る力はもっている。子どもたちはそこにもっともっと触れてもらいたいのではないか。一人一人の感性を大事にできるおとなになりたいと思う。

一方、子どもたちに接する親の心のケア、あるいはサポートも大切。日々の忙しさ故に、辛く当たったり、暴言を吐いたり…。優しい気持ちで子どもに接することができるようにと、一緒に支え合え、育ち合いたいという地域での会をずっと大事にしている。

自分で考えられない子ども、それから、人をあてにする子どもが多い。それは、小さいときから話し合っただけで自分の気持ちを語る場が家庭にも学校にも少ないのではないか。例えば、学校で子どもたち同士で問題を起こしても、自分で考えて、自ら行動を起こさないと、いつまでも同じことを繰り返してしまう。自分の意見をもって語り合える場を、学校現場の中でも増やして欲しい。

テーマが非常に大きかったが、皆さんの貴重な意見を聞いていたら、やはり教育の原点っていうものはこの皆さんの意見にあるように思った。これまでの人権問題にかかわるテーマの締めくくりとして、今後の取組の参考にしていただきたいと思います。